小学校における校内授業研究の実施方法の改善
－「書く力」の育成をめざす取り組みを通して－

学籍番号　229101
氏　　名　荒木　淳一
大学院主指導教員　寺嶋　浩介
大学院副指導教員　田中　俊弥

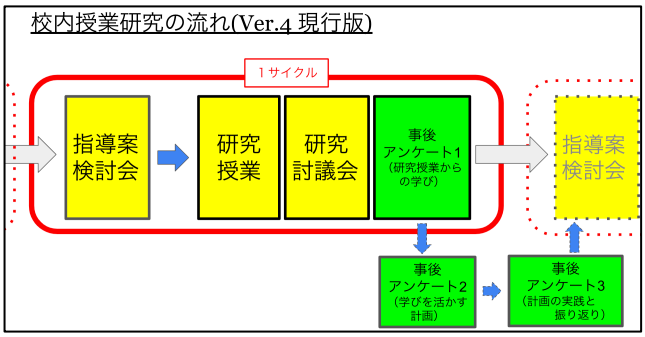
１．背景と目的

筆者が所属するB市立A小学校では，基礎的・基本的な知識及び技能の習得や，「書くこと・読むこと」の力の定着について課題があり，2021年度からは，「書く力」の育成を校内研究主題に設定している。そこで「書く力」の育成に関する教師の授業力を向上するための校内授業研究について，管理職や所属校教員にアンケート調査をしたところ，「授業研究の結果が自身の授業力向上に繋っているという実感が教員に乏しく，授業研究が日々の授業に還元できているかを評価する基準がないため，効果検証もなされていない」という課題が明らかとなった。

課題を踏まえ，児童の「書く力」の育成を図る取り組みを通して，校内授業研究会の実施方法の流れを段階別（指導案検討会・研究授業・研究討議会・事後アンケートによる振り返り）にシステム化したものを作成することにした。また，その中で実施方法を適宜改善しながら運用していくことで，教員の授業力向上をめざすことを本実践研究の目的とする。

2.「校内授業研究の流れ」の作成

先行研究と校内の実態調査の結果を踏まえ作成した「校内授業研究の流れ」の図を基に，各授業研究会を１つのサイクルとして改善を繰り返す。研究授業「事後アンケート」では各教員が振り返りを行ない，そこから得た学びを活かすための授業研究計画を立て，実践する。アンケートと実践結果は筆者が分析し，校内で共有を進めた。



３．基本学校実習の取り組み

「校内授業研究の流れ」の図と授業研究会の各段階における活動内容の詳細や，研究授業事

後アンケートを作成し，適宜改善をしながら校内研究授業を計画，運営した。筆者は事後アンケート1の結果の分析をもとに研究部へ提案を行い，討議を通して改善も行なった。

その結果，研究授業参加者の学びが校内全体に共有され，日々の授業に活かされたことが，教員への振り返りアンケートから確認された。B 市小学校学力経年調査の結果からは，児童の「書く力」の向上も確認された。しかし，このアンケートの回答結果はあくまでも教員の主観によるものであり，実践の効果検証としては客観性が十分とはいえない。また，児童の「書く力」の育成に関わる「教師の授業力」の定義が明確ではない，などの課題が明らかになった。

４．発展課題実習の取り組み

基本学校実習で明らかになった課題を受け，発展課題実習では先行研究を参考に，児童の「書く力」の向上に必要な「教師の授業力」を学年ごとにリスト化した案を校内に提案し，討議を経て定義した。また，実践の効果検証を多角的に行なうために，「『書く力』を育成する教師の授業力」自己評価アンケート（教師用）及び「『書く力』についてのアンケート」（児童用）を作成し，実施した。授業研究会では，「校内授業研究の流れ」の各段階において，「書く力」を育成する「教師の授業力」をもとにした指導計画が実践されているかの検証を行ない，適宜改善を行なった。

その結果，全国学力学習状況調査の結果から，児童の「書く力」の向上が認められたが，「『書く力』を育成する教師の授業力」自己評価アンケート（教師用）からは，教員が自身の「授業力の向上」を十分には実感できていない，という課題が明らかになった。

5．今後の課題

本実践の課題としては，小学校学力経年調査や全国学力学習状況調査の結果から，児童の「書く力」の向上が認められたが，「『書く力』を育成する教師の授業力」自己評価アンケート（教師用）の 2023 年 6 月と 10 月の結果の比較からは，教員は自身の「授業力の向上」を十分には実感できていないことが示された。「校内授業研究の流れ」というシステムを作成して共有すれば校内授業研究は活発化し，その結果，教員の「授業力の向上」を実感することにも繋がることを発展課題実習の初期では想定していた。しかし，システムを作成して共有し実践するだけでは，「書く力」の育成という同一の研究主題で継続した校内授業研究への，教員のモチベーションを維持・向上させることが難しく，自身の「授業力の向上」を実感するまでには至らなかったのではないかと考えた。

今後は，「校内授業研究の流れ」というシステムやデータの活用に ICT を利用することは継続しつつ，校内の教員間のコミュニケーションの充実といった面にも着目し，教員の校内授業研究へのモチベーションを維持・向上させるための仕組みづくりを検討，実践する必要があるといえる。